

『頓悟大乘正理決』の妄想説について

原 田 覚

一、序 近来、摩訶衍 (Mahayan) に関する西藏資料の紹介が行なわれ、また、摩訶衍の名を持つもの、或はその名で呼ばれるものが、史上幾人か存在している事も、明らかにされている。ここでは、Bsam yas の宗論に関わりを持つた摩訶衍を説明する為に、特にその思想の整理、及び敦煌禪資料との比較を行う事とする。

この摩訶衍の思想を伝える、最も確実な資料として、敦煌発見の『頓悟大乘正理決』（『正理決』）が、広く知られている。ここでは、特にこの『正理決』を資料として取り上げるが、なお次の点に留意せねばならない。

『正理決』は、印度仏教との論争と、賛普に対する摩訶衍の上表文とによって、本文が構成されている。従つて、多少の誇張や省略を予想した上で、印度仏教に対する摩訶衍の思想的特質を把握する事は出来るが、摩訶衍の思想の全体的構成が如何なるものであつたかについては、なお慎重に考慮せねばならない。また、本文の編集が、王錫の手によってなされ

た事にも留意せねばならない。

二、『正理決』 『正理決』中に於て、摩訶衍の禪門の本宗は、真諦であり、般若真宗であり、大乘禪であると宣べている。この大乘禪の特質が、六波羅蜜と妄想の扱いに見られる。

(1) 六波羅蜜 上表文によれば、印度仏教との論争の焦点が、六波羅蜜の問題にあり、賛普からの下問も屢であつた事が知られる。また、六波羅蜜について、次の議論がある。

「世諦法ノ如クンバ、六波羅蜜等ヲ方便ト為シ、勝義ヲ顯ス。故ニ是レ不要ニアラズ。勝義ノ言説ヲ離ルル如クンバ、六波羅蜜及ビ諸法門ハ、要・不要ヲ説キテ言フベカラズ。」（長部好一「吐蕃仏教と禪」愛知学院大学文学部紀要一・80頁左34（右3））

その他、六波羅蜜に関わる問答を見ても、この問題を印度仏教が追求するに急であつた事が知られるが、一方、摩訶衍の議論には、六波羅蜜の問題を、勝義と世俗の關係に解消して、追求を逃れようとした様子が伺われる。

「六波羅蜜ヲ行ズル所ノ者ハ、般若波羅蜜ヲ求メントス。若シ智

慧波羅蜜ノ具ハレバ、余ノ五波羅蜜、修スルト修セザルトモ、マ
タ得ルナリ。」(「吐蕃」81頁右23～24)

ここには、神会の般若波羅蜜に対する理解と同質のものが
見られる。一方、六波羅蜜を内外の二種、或は四種に分類す
る理解も見られ、それは他の禪籍と比べて、特異なものと考
えられる。以上詳論は避けるが、摩訶衍の説く六波羅蜜の内
容と位置は、なお慎重に比較考証されねばならない。

(2)妄想 『正理決』に於て、印度仏教に対する答釈の内、
經典の引用を除いた大部分が、何らかの形で、「妄想」に関
説したものである。結論から言えば、『正理決』の思想は、
「妄想」の把え方を中心として展開している、と考え得る。
即ち、「妄想」に関して、次の如き議論が見られる。

「但ダ心想・妄想ヲ離ルレバ、即チ卅七道品自然ニ具足ス。一切
功德モ亦タ皆円備ス。」(「吐蕃」78左10～11)

「若シ衆生有リテ、三毒煩惱・無始心想・習氣妄想ヲ離ルレバ、
便チ解脱ヲ得、マタ成仏スルヲ得ル。」(「吐蕃」78左13～14)

「言フ所ノ漸頓トハ、皆衆生ノ心想・妄想ノ見タリ。」(「吐蕃」79
右6～7)

「若シ安心起コラズ、一切妄想ヲ離ルレバ、真性本有、及ビ一切
種智、自然ニ顯現ス。」(「吐蕃」81右1～2)

「若シ一切衆生、三毒自心・妄想煩惱・習氣分別ヲ離ルレバ、如
如之理ニ通達ス。則チ一切法及ビ諸功德ヲ具足ス。」(「吐蕃」85
左4～6)

『頓悟大乘正理決』の妄想説について(原 田)

「妄想ノ作業ニ順ゼザレバ、念々解脱ス。」(「吐蕃」85左25～26)
以上の如く、『正理決』中に見られる概念のほとんどが、
「離妄想」によつて理解されている事が知られる。また、
「想」について、次の如く論ずる

「想トハ、心念ノ起動、及ビ外境ヲ取ルコトナリ。一切ト言フハ、
下地獄ニ至リ、上諸仏ニ至ル已下ナリ。」(「吐蕃」79右13～14)

ここで、前に述べた「離妄想」の経証として、『金剛經』
の次の句が、屢々引かれている事が注意される。

「一切諸相ヲ離ルレバ、則チ諸仏ト名ヅク。」(大正8・No. 235・
750b9)

『正理決』に於ける『金剛經』の引用は十四回であるが、
この一句が、その内の七回を占め、重複して引用される回数
が、他の引用經典と比べても、最も多い。また、引用の半数
近くが、「相」を「想」(即ち「妄想」となしている事が注意
される。そして、次の文を見ると、この変化が、単に書写の
誤りではない事が理解される。

「金剛經及ビ諸大乘經ニ拠レバ、皆云フ、(一切妄想習氣ヲ離ルレ
バ、則チ諸仏ト名ヅク。)(「吐蕃」77右19)

即ち、『正理決』は、『金剛經』のこの一句を基礎として、
「離妄想」を中心に展開する論書である事が理解される。

三、『金剛經』 上述の『金剛經』の句を中心に考えると、
『正理決』と同様に、「相」を「妄想」として把える事を明

確に論じたものに窺基（633-688）の『金剛經講述』があるが、ここでは特に、『金剛經』の引用を中心とした、敦煌発見の禪籍との比較を行う。

(1) 神会 神会は、北宗に対して、『金剛經』を宣揚し、独自の思想を展開した禪者として知られる。胡適氏の『神会和尚遺集』に収められた資料を見ると、『正理決』と一致する『金剛經』の引用が、九回（六ヶ所）見られる。上述の句も、二回引用されているが、それ程重視された様子はなく、また、「相」を「想」とする例も見られない。

思想的にも、神会の特色である、如来禪、或は無念為宗などの影響があると見るのは、困難である。ただ、前に論じた般若波羅蜜の扱い方には、なお留意する必要がある。

(2) 『歷代法宝記』 『歷代法宝記』に於ける『正理決』と一致する『金剛經』の引用は、九回（五ヶ所）に及び、問題の句が四回引用されている。特に、後叙の中で無住の坐化を述べている次の部分は、問題の句が、無住にあつて、重要な位置を占めていた事を、伺わせる。

「（…一切諸相ヲ離ルレバ、即チ是レ見仏ナリ。」語リ已リテ奄然トシテ坐化ス。」（大正51・No. 2625・16b4）

しかし、「相」を「想」としている所は、見出されず、また、無住の思想の特質である「無念」も、『正理決』に見出されない。しかし、『金剛經』と共に、『楞伽經』をも多く引

用し、その中には『正理決』と同じ引用ヶ所が見られる。

以上の如く、『正理決』と、特に南宗系の禪籍の間には、直接の關係を示す内容が少ない。しかし、神会の般若波羅蜜、『歷代法宝記』の引用經典などには注意せねばならない。

即ち、Sam yasの宗論に於ける摩訶衍の主張を伝える西藏資料は、摩訶衍が南宗的色彩を持つ事を伝えている。また、北宗系の禪籍の西藏訳の存在が知られる一方、南宗系の西藏伝播の指摘が行われている。これらと摩訶衍との関連が問題となってくるが、この問題は、西藏仏教に於ける中国仏教、即ち禪宗の流入と発展の解明に關係してくるものである。

四、妄想 『正理決』の「離妄想」と、「妄想」に關説する他の禪籍との比較を、以下に行う事とする。

(1) 『二入四行論』 同論には、「妄想」に關説するものが幾つか見出され、この述語が古くから禪宗に取り入れられていた事を伺わせる。その他『絶觀論』『観行法』『無心論』『修心要論』などにも、「妄想」について論ずる所が見られるが、『正理決』との関連は、機会を改めて論ずる事とする。

(2) 『大乘五方便北宗』 鈴木大拙氏は、北宗の特質を、「離念」に於て把えている。同氏の示す一〇四号本中には、「妄想」に關説するものが僅かであるが、南宗の「無念」に対する「離念」に、より「離妄想」との近縁性が認められる。同じく鈴木氏の示す『師資七祖方便五門』には、次の句が見ら

れる。

「妄念ノ起コラザレバ、菩薩ト名ヅク。一切相ヲ離ルレバ、仏ト名ヅク」(鈴木全集二・453頁10)

この資料が、『金剛經』の句を知つていた事は明らかである。

(3) 『法性論』 同論には、次の句が見られる。

「妄想ノ起コラザレバ、自然ニ仏性顯現ス。故ニ般若經ニ云フ、一切想ヲ離ルレバ、即チ諸仏ト名ヅク」(鈴木全集二・144頁13—14)

この資料が、「相」を「想」とし、さらに「妄想」として理解している事が知られ、『正理決』と最も近似した思想を持つ事がわかる。しかし、同論は、『正理決』に比べて、より南宗的色彩の濃いものである。しかし、『師資七祖』と共に、同論は短文の資料である為、より詳細な比較が如何なる意味を持つか、問題となる。また、両論は共に、禪宗史的位置が、未だ確定しているとは言い難く、摩訶衍自身が表明している法系との関係も、速断する事がむずかしい。

(4) 以上論じたものの外に、『大乘開心顯性頓悟真宗論』にも、妄想に關説する部分が見られる。

「世尊ハ、実ニ妄想ヲ遣断セズ。若シ妄想ヲ断ズレバ、即チ妄想ヲ離レズ。」(大正85・No. 2346・1278 c. 23—24)

この様な論述は、『正理決』よりも、さらに一歩進んで、南

『頓悟大乘正理決』の妄想説について(原 田)

宗系に近い「妄想」の扱い方を、表わすものであらう。

五、結語 以上概略のみを論じたが、これによつて次の事が確認される。

(1) 『正理決』の中心思想は、『金剛經』の一句を基礎として展開する「離妄想」であり、細部の述語や内容を別にして、殆どこれに尽きると考え得る。

(2) 題目に「頓悟」の語が付されているにも関わらず、その中心的思想には、南宗系の影響を余り見出す事が出来ない。ただ、六波羅蜜の扱い方や、小島宏允氏(チベットの禪宗と『歷代法宝記』)が既に指摘している『諸經要抄』や『歷代法宝記』に於ける經の引用との類似などに、南宗系との関わりを認め得るに過ぎない。

(3) 『正理決』の思想は、北宗系の『大乘五方便北宗』・『師資七祖方便五門』に、或はさらに『法性論』に、最も近似した内容を見出し得るが、決して全同とは言い得ない。それを神秀系の発展として把えるか、或は別系の思想と把えるかは、なお慎重に考慮されねばならない。

(4) 特に今後の問題として、既に触れた如く、西藏文の摩訶衍資料との比較整理が必要とされ、それによつて、bsam yasの宗論に關わつた摩訶衍の全体像が得られるであらう。

(註略)